町民文芸

只見短歌会　令和四年十一月詠草

新聞を前に眼鏡と拡大鏡揃えても読めぬ我が老深む　馬場　八智

数十年思ひ綴りし亡き父母の日記に夫は深く頷く　目黒　富子

車窓より眺む山並紅葉や川の流れに鴨の群れ見ゆ　関谷登美子

昨年のシクラメンの花秋の日を浴びて今年も窓際に咲く　新国由紀子

中学の孫にパソコン教はるる夫との会話厨にて聞く　渡部ヨリ子

洗髪から足の先まで丁寧に風呂入れくれし介護士優し　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　十一月定例会

日高俊平太　指導

凛とした母の笑顔や七五三　信

雨に濡れ山茶花散るや廃校舎　都

部活動終えてほおばる栗の飯　一恵

間引菜や大づかみして日の温み　一恵

銀杏を踏まじと歩む史跡かな　一恵

冬陽あび水鳥影引く古戦場　真理子

秋雨の畑の中に椅子ひとつ　紺青

錦秋の裏山褒めて立ち話　紺青

只見線再開秋の山を抜け　恒夫

喉渇き山の葡萄へ手を伸ばす　恒夫

冬来たる昭和ひとけた幾昔　恒夫

作業着を脱いで一葉の紅葉かな　恒夫

傾きし日差しや雨後の草紅葉　礼

子の住まい年々遠くなりし秋　一穂

おゆうぎ会着ぶくれし祖母涙して　修一

残し居くざる菊今日は切ろうかな　修一

朝露に濡れし芒の輝けり　修一

ベビーカー急ぎ押す手に秋の雨　修一